



まったくだなかの自閉症児のおかあさんが、家で子どもが荒れていることを学校の先生に相談したところ、「学校ではなにも問題ないですよ、がんばってくださいよ」と言われて、その後、相談できなくなってしまったと言うのです。このときの学校の先生は、おかあさんを励ますつもりで話されたのだと思うのですが、家での様子をもう一步想像して語りあげることが必要だったのかもしれない。学校でがんばりすぎていることだってあるかもしれない、今までと同じような家での生活では物足りなくなってきたのかもしれない、青年期らしい親離れの要求が高まってきている

成人期のなかまたちが

教えてくれること

これまで子どもやなかまを「まるごと」とらせることの大切さが徐々に語られてきました。障害、発達、生活をまるごととらせる、24時間の生活をまるごととらせる、ライフサイクル全体をまるごととらせる等々。今回は、この「まるごと」とらせることがなぜ大切なのか、そのためにはなにが必要なのかを考えます。

今、あらためて子どもやなかまを

「まるごと」とらせることの意味を問う

肢体不自由のある女生徒が、高等部になって、おかあさんの介助を激しく拒否するようになったことがありました。「こんなにていねいにあなたを育ててきたのに」という思い、「私の介助がなかったら、あなたは生きられないのに」という思いが絡み合い、わが子の身を案じつつも腹も立って「もういい。好きにきなさい」と言ってしまっ日々だったそうです。学校の先生と相談しあつていくなかで、きっかけは、クラスメイトが学生ボランティアと一緒に休日に外出して楽しかったという話を聞いたことではないかということが見えてきました。その後、彼女も学生ボランティアとの外出をするようになると、再びおかあさんの介助も受け入れていくようになります。彼女の拒否は、おとなになる道行きで必然的に起きた「親離れ」の要求であったわけですが、家だけの姿、学校や施設だけの姿を見ているだけでは、行動や変化の意味が見えてこないことも多いように思います。一方で、こんなこともありました。思春期

のかもしれない、いろいろな理由が考えられるわけですが、一緒に語らないと見えてきにくいし、理由が推測されたとしても、語りあうことで初めて共感をともなった共通認識になっていくのだと思います。その共通認識ができるからこそ、家、学校それぞれでできることはなにかを考えたり、家と学校以外にも過ごす場を一緒に見つけていきましょうというふうにもつながっていくのでしよう。

「まるごと」とらせることによって、一つひとつの現象のもつ意味がみえてくる。逆に言えば、一つひとつの現象を見ているだけでは、そこに隠れた発達要求に気づけない。熱心な保護者や支援者であれば、「もつとわかつてあげなくては」「私がなんとかしてあげなくては」と考え、その結果、保護者や支援者だけでなく、本人自身も自分の本当の「ねがい」に気づけなくなってしまうこともあるように思います。複数のまなざしで「まるごと」とらせることで初めて、子どもやなかまに必要な「間」や「距離」がつけられるようになる。その「間」や「距離」があるからこそ、本人も自分の「ねがい」をつくり、自分をつくりかえていくことができるのだと思います。

全体像がみえない？

一方、子どものこと、実践のことを語り合う学習会や検討会を続けているなかで、事例の背景がわからない、就学前あるいは学齢期からの育ちの経過が想像しづらい、家での様子が見えてこない、と感じることが増えてきました。あるいは、その実践や授業における



最終回 職員集団を考える②



滋賀大学 白石恵理子

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。おもな著書に『一人ひとりが人生の主人公』『しなやかにしたたかに仲間と社会に向き合って』『保育・教育のための発達診断』（共著）（いずれも全研出版部）『人間発達研究の創出と展開—田中昌人・田中杉恵の仕事を通して歴史をつなぐ—』（共著）群青社など多数。